

ては拙稿「ペリオ将来のスパシ出土木製舍利容器三種」(同号)参照。

なお水野清一教授は「敦煌石窟ノート」(仏教芸術、三四号、一九五八)においてこの木村氏藏舍利容器の有翼天使とミラーン古址のそれとの繋がり重視される。

しかしこれだけのことから「三〇〇年から五〇〇年にかけて西域地方におこなわれていた画風が、南道と北道に対立せず、ミラーン・キジールふうのものであったことをしめす……」とされたことには私は賛成し得ない。

- 8 この表現上の相違は、図版に掲げた第五古址腰張りの少女像頭部を、第三古址回廊上部からG断片(MW.0019, "Serindia" Pl. XLIV, Andrews "WallPaintings" Pl. II)にみる同様な巻髪や頭飾りを持った二少女像の、既になりに固くなった面貌と比較することでも明瞭であろう。

- 9 尤もこの点に関しては、熊谷氏は第三古址天使像下半部の半円形的処理を花綵の省略形とみなくてもよいという立場を示しておられる。

- 10 第三古址と第五古址との比較論において、見逃しえないのは、次節に述べる第五古址内陣外側の歩廊を飾っていた有翼天使像である。ことにその下半身を限る半円形の縁帯につけられた特異な装飾文様はスタイン以来中国的と解釈され、第五古址の年代的下降を示すものとされる。しかし中国と楼蘭との関係が漢代において密接であり、三国時代以後とされたという歴史的事情に鑑みれば、漢式雲文に由来するというこの装飾の存在を、三・四世紀の間における年代下降の証拠にすることは、疑問があるのではなからうか。

- 11 なお又、スタインも指摘するように、第三古址の天使像の顔立ちがいずれも比較的面長であるのに対し、第五古址の方は、短い四角ばった顔である。橘師将来品がまた明らかに後者の面立ちを示すことも、この断片を第三古址の一群と区別する一証拠となろう。

木造菩薩(弥勒)像

奈良 東大寺中性院藏

東大寺のような大寺にはいまだに調査洩れの仏像に憊れた作例が見出され

ることがある。昭和三十三年二月、重要文化財に指定された指図堂の脇壇の本尊釈迦如来坐像や塔頭中性院持仏堂の本尊菩薩(弥勒)立像はその例証に挙げることができる。前者は小仏ながら檀像風の美作で、像底の墨書の造像記と納入の願文等によって嘉禄元年(一二三二)仏師善円の作であることが知られ、後者はここに図版に掲げて紹介する像で、これも納入の汚損甚しい写経の奥書によって建久年間の作と推知される優作である。

この菩薩立像は戒壇院の千手堂の須弥壇の下に納置してあったのを中性院の現院主北河原公海長老が昭和の初めの頃自坊の内仏として迎えられたのだそうである。千手堂にあった時は勿論一般に知られず、中性院に移された後、吉野地震等で一部破損したのを、太田古朴氏が依頼を受けて小修理を加えた際、三十年の夏頃新聞誌の地方版に報道されたことがあり、その後三十一年十一月文化財専門審議会に提案されて重要文化財に指定の決定を見、翌年二月指定が公示された。それより先、太田氏は三十一年十二月発刊の「史迹と美術」第二六八号に、「東大寺中性院の推定快慶作観音立像」の題で修理の経緯、像の構造等の報告に併せて本像が俊乗房重源の南無阿弥陀仏作善集に載録する安阿弥陀仏快慶の作る厨子仏の本尊阿弥陀三尊の脇侍の一昧の観音像であることを推論された。太田氏の言を俟つまでもなく、本像は鎌倉時代初頭の数ある彫像の中でも抜群の名作と躊躇うことなく推すことが出来る。本像独自の引き締って潑瀾とした造型、精緻微妙な相貌、複雑な衣文を自由にこなした卓越せる刀技の冴えもさることながら、鎌倉時代彫像に於ける新様の発生という史的考察の上に、さらには作者の問題についても深甚の感興をわれわれに提示して一層の考究慾を誘うものがある。

ここでは、この像についての形容、構造ならびに修補の箇所、像内納入経卷等具体的な報告にとどめてこの像の作者あるいは彫刻史上に占める意義等についての詳論は他日を期したいと思う。ただ一言私見を加えれば本像の作者につ

にして立つ。左肩より右脇下に条帛をかけその上に天衣を纏う。天衣は通行のものと異り背部にかかる部分は幅広く厚手で、背面より左臂にずり、気味に懸かるが、左上膊部の内側、即ち体部に沿うてU字状に反転して前膊より左脚外側に垂下、右側の天衣は右上膊の外側に沿うて垂れU転して前膊上部にかかり、腕の内側より蓮座上に垂れる、裳は一段折返して、僅か裾短か目にまとう。なお、臍が類の少ない渦巻形に刻まれているのが注目される。蓮座は六重で踏割蓮華（蓮弁五重）敷茄子（唐花様透彫付）、胡桃形反花、三重六方入角隅足付丸框、蓮弁以外は光背共々後補（寛永五年）である。

物 入 納 内 像

材料の品質。檜材、木寄造、漆箔、白毫は水精、玉眼、宝冠胸飾は銅製鍍金、台座光背、木造、漆箔。構造。頭部は頭頂部を椀形一木の別材（横木）を以て耳上で横矧ぎし、髻部もまた別材（縦材）にて矧付け（髻部には各所に矧木がある）。頭部は耳の前後で縦に割矧、頭部は内剝を施し頸部を通して軀軀の内剝に連絡する。頭部と軀軀とは三道下から背面上部にかけて割矧ぎとなっているように推測される。軀は大きくは前後二材に矧ぎ、さらに部分的に腹の前部、臍を中心として条帛を含めて裳の上際まで半円形に別木を以て矧合せ、左側面の腰下の部分、背面裾下の一部裾下辺より約九厘上の部分横に一直線に矧ぎ目があつて、それぞれ別材を矧付けていることが判る。両手は別材で両肩、肘、手首等で矧付け、両脚は前述太田古朴氏の論文によると別材で造り、胴内にはめ込み、像の枠木に挿込んで接着する方法がとられているという。両足先、天衣の遊離せる部分も別材で矧付ける。

いては結論的には太田氏と同じ意見を持つものであることを記しておく。
像容は図版でほぼ判るように高髻（鎌倉時代以後通例の細）・地髪は毛筋彫で髪際は緩い波形をなしており特に天冠台は作らず、銅製鍍金の宝冠を戴き、同様の胸飾（環珞付）を懸ける、左手屈臂して未敷蓮華（太田氏補作）を執り、右手は五指を伸ばし掌を前にして垂下、腰を左に捻り右膝をやや屈し僅か踏出し気味

修理後補の箇所の主なものは、本軀では宝髻の一部、左手は第三、四、五の三指の付根より、右手は第二、三、四、五の四指、付根附近より、裾の背面中央下端部、裾先の一部、足柄の大部分、天衣は右肩に懸る外側の一部、左臂内側の一部右側垂下部、右臂前に懸る部分等、その他光背台座（蓮弁を除く）も後補である。（銘文集参照）。

なお欠失せる主な箇所は天衣の右脇下下縁の一部、右側垂下部等である。

この像には像内部に虫損の甚しく、且つ湿気のため固く棒状となつた経巻一巻が納められていた。太田氏によると、昭和七年の修理の時に発見され、その際は開きかけて中止した状態で再奉納したらしいものを、同氏は「(上略) 軸木迄切開いた結果、経巻末の奥書と思われる墨書の一部と、朱書せる年記を明らかにすることが出来た。(後略)」として、次の如く判読されている。

万億 文要

涅槃經

隆

以上墨書

以下朱書

大師師

建久四年

この年記を有する納入経は太田氏も述べられている如く「本像の彫刻としての価値を更に不動のものにするに足りる貴重な」資料に相違ないが、氏があせらずにいま少し慎重に専門の表具師にでも依頼されて開かれたなら経典が何経であるか、また年記や更には像の作成の縁由についてもあるいは判明したのではないかと誠に遺憾に堪えない。しかしその後小林剛君が丹念に調査されて断爛せる残片が弥勒上生経の末文の一節の文字に符合することを確かめられ、経名典のみでなく、この像が寺で観音像として奉安されているのが弥勒像であることを提唱されるに至った(大和文化研究第二十一号)。ボストン美術館の興福寺旧蔵快慶作弥勒菩薩と同様な例である(ボストン美術館弥勒像にも弥勒上生経一巻が納術研究五十七号並に造像銘記参照)。ただし本像は戒壇院千手堂の須弥壇下に納置される以前は千手観音の厨子の両側に他の一軀の像と共に脇侍の如き状態で安置されていたという。その本像と対をなしていた像が目下不明であるので何とも仕様がなないが、ボストン像と殆んど同様な姿態でもあること故、元来弥勒菩薩

薩の独尊像として造立せられたと解してよいであろう。本像が重要文化財指定の際には納入の経典名が不明であつたので「菩薩立像 一軀」として指定されている。次に小林君の鑑に倣つて弥勒上生経の末尾の一節より本納入経の断片の文字を拾つて見ると次の通りで、小林君は遠慮勝ちに明確な文字以外に敢えて触れられず判読されているが、それ以上に同一視可能な文字を当て嵌めることが出来る。

(弥勒上生経卷末の一節)

爾時尊者阿難即從座起。又手長跪白仏言。
世尊。善哉世尊。快説弥勒所有功德。亦記未來世修福衆生所得果報。我今隨喜。唯然世尊此法之要云何受持。当何名此經。仏告阿難。汝持仏語慎勿忘失。為未來世開生天路示菩提相莫斷仏種。此經名弥勒菩薩般涅槃亦名觀弥勒菩薩(生兜率)陀天。勸發菩提心如是受持。仏説是語時。他方來會十萬菩薩(得)楞嚴三昧。八万億(諸)天發菩提心。皆願隨從弥勒下生。仏説是語時。四部弟子天龍八部。聞仏所説皆大歡喜喜仏而退。

仏説觀(弥勒菩薩)上生兜率天經

(以下納入経朱書奥書)

一 大法師 建久四年

右納入写経の文字の比較的大きい断片はガラス板縦一・七厘横一六・四厘に挟み保存しているが、他は図版の如き状態である。軸木は中央で合せる仕組の此時代通途の型式で、この軸木より推察すると写経は、ほぼ縦二・七五厘であつたことが判る。なお竹製の八双の残片長六・七厘幅〇・六厘があり、これには銀箔の紙が貼られ

(経文は写経の通例に従つて、仮に一行十七字として活字に組んだ。)

*納入経に「槃」字下に「経」字あり

(枠で囲む文字は納入の墨書の写経で読み得るもの、枠内括弧内の文字は強いて判読し得る文字。但しこれはガラス板で挟んだ断片のみによつた。断片のうちに判読できる文字もあるようである。小林君が一行目の「者阿」を挙げられているのはその一例であろう。)

である。

この他像内に別に次の紙片が納められていた。

「昭和七年十二月、奉修補 菅原安男（花押）」

これは中性院に移安されて後、応急修理の際の書付であろう。

また台座裏面に左の墨書があり、寛永五年座光の新造されたことが知られる。

「寛永五年 辰 秋時正後光台令新造

備逆修二十五年随一作善奉析

開悟得脱上生内院者也

干時別会五師

尊慶得業敬白」

（法 量）

像高（右足先にて）	102. 7 cm
頂より頤に至る	24. 1 ヶ
髪際より頤に至る	10. 3 ヶ
面 巾	9. 7 ヶ
耳 張	12. 35 ヶ
面 奥 張	12. 35 ヶ
臂 張	29. 4 ヶ
裾 張	23. 8 ヶ
足 開	19. 55 ヶ
踏割蓮華肉張（最大）	27. 6 ヶ
蓮華座全高	28. 15 ヶ
下 框 張（最大）	43. 95 ヶ

（後記） この解説について、東大寺図書館の堀池春峰氏を通じて北河原長老は尊像

の図版掲載の承認の好意を寄せられると共に中性院に移安以前の所在等につき種々示教を与えられたこと、品質、構造や修補の箇所等の具体的な記述については去る三十二年七月十一日調査を共にした倉田文作、西川新次両君の調査ノートの貸与を受けて出来るだけ正確を期することが出来たことを附言して謝意を示したい。また太田古朴氏については「史述と美術」の論文についても負うところが少なく有難く利用させて頂いたが、なお示教を乞いたい点があるのにその暇のなかったことを残念に思う。

また掲載図版は坂本写真研究所の好意によるものであり、挿図は飛鳥園の作製の焼付によったことを附記して併せて謝意を表したい。

（田 澤 坦）

図 版 要 項

一、ミールン第五古址回廊北側壁画（原色版）

ニューデリー 国立博物館中央アジア部蔵

（写真 秋山）

a 美しき巻髪の乙女

b 花綵を担う裸形の童子

腰張全高 約 九二糎
人物面長 約 一六糎

図版解説参照

二、四天王奉鉢

シクリの仏塔基部 二世紀 ラホール博物館蔵

（写真 高田）

高 三三糎

三、仏立像

タフト・イ・バーヒール出土 二世紀

ペシャーワル博物館蔵

（写真 高田）

高田修「ガンダーラ美術と仏像の出現」参照

四、木造菩薩（弥勒）像

奈良 東大寺中性院蔵

（写真 坂本写真研究所）

像 高 一〇二・七糎

図版解説参照